

## リアルの世界

四国情報通信懇談会

副会長 松田 清宏

(四国旅客鉄道(株) 代表取締役会長)



近年の情報処理技術の進展には、本当に目を見張るものがある。まさに、「何でもできる」感じを持つ。

自動車だって、自動運転がもうすぐ手の届くところに来ている。自動運転まで行かなくても、ミリ波レーダーと画像処理で、カーブやレーンをしっかり車が判断して前車との車間距離を測り、適切な車間距離を維持してくれる。こうして、高松―松山間の高速道路をアクセルとブレーキ操作から解放されて行き来している。また、車線を逸脱すると警告もしてくれる。(お世話になったことはないが、運転がおかしくなると警告もしてくれるらしいし、低速域では自動ブレーキで追突も防いでくれるらしい。) これらの安全装置をもう2代(台) 続けて多分数十万円で手に入れている。加齢による判断と反応の微妙な遅れに有効と思っており、ICTテクノロジーさまざまである。

しかし、「運転は自分」でしている! 前(周囲)をしっかりと見、ハンドルを適切に操作し、速度計だけでなく必要な計器等から自車の状態を監視し、運転している。フリーになった右足は、いつでもブレーキを踏める準備をしている。自分が居るところは「リアル」の世界だからである。

情報処理技術が進歩し、瞬時に必要な情報が沢山得られ便利になったが、それをどう活かすかは「人」次第である。更に言えば、「人間社会」である。人と人のコミュニケーションがうまく機能していなければ、情報もただの情報の域を出ないであろう。情報化社会になればなるほど、Face to faceの繋がりが求められる所以である。

リアルとヴァーチャルの問題は、何もゲームや一部のSNSの問題だけではない。しっかりとリアルの世界で活動することが、情報化社会をより素晴らしい社会に磨き上げる王道と思っている。